

【研究ノート】

# 面会制度からみるハワイの戦時強制収容

## —日系人抑留者とその家族の体験—

秋山かおり

総合研究大学院大学 文化科学研究科 日本歴史研究専攻

本稿は、1941年3月より1945年8月頃までホノウリウリ抑留所に収容されていた日系人と社会に残された家族の体験を、そこで行われていた面会制度を軸に分析し、ハワイの戦時日系人強制収容についてのひとつの視点を提示するものである。

日米開戦とともに始まったハワイの日系人強制収容は、その日系人の一部が抑留された。しかしその傾向については、これまで当事者の事前選別に始まる逮捕、抑留、そして釈放などの事件の被害的な経過を中心に語られてきた。また、ハワイから約1,000名の抑留者の家族が経済的疲弊などにより、すでにアメリカ本土に移送された夫や父親と暮らすために、本土の日系人収容施設へ自ら抑留されたことも特徴とされてきた。しかし、真珠湾攻撃後から使用された湾岸沿いのサンドアイランド抑留所が閉鎖されオアフ島山間部ホノウリウリ抑留所が開設されて以来、そこを訪ねた家族の抑留者との面会を通じて生まれた体験については注目されてこなかった。

戦時下のハワイを生きた抑留者とその家族にとっては、この面会は苦痛をとまなう行為ではあったものの、それぞれの生活において重要な位置を占めていた。面会の詳細については、複数のオーラルヒストリーから、軍のバスによる送迎、抑留者と家族の物資の交換などがあったことがわかりつつある。なかでも、抑留者の家族はハワイ社会から受ける差別と疎外感から、抑留所での「面会」を意識しながら社会生活を送り、抑留者は社会から隔離された日常生活を「面会」を楽しみにしつつ抑留生活を耐えるという、両者が面会を心に抱いて過ごしていたことに着目するべきである。「ホノウリウリとハワイ社会の一体化」のようにも見える面会は、抑留者とその家族の、抑留所の内と外に分断されてしまったそれぞれの生活を近づけようとしていたことの現れだと考えられるからである。「ホノウリウリ」は抑留所でありながら、両者が戦時下の生活を耐えるための「確認の場」ともなっていた。

しかしハワイに残った抑留者とその家族の問題については、抑留者と家族がともに暮らせる居留区を抑留所内に造る案が連邦政府と軍政府により検討されたが実現しなかった。戦局の変化により太平洋戦線から送られてくる戦争捕虜のための用地を確保しておく必要があったからである。

またオーラルヒストリーから、軍部の抑留者管理の方策として、所内で穏当であるようにという抑留者側への交換条件が付随していた、という可能性もある。このような軍部の面会の利用は抑留者と家族の経験へのより深い洞察とともに、今後の調査が必要だと考える。

キーワード：太平洋戦争、ハワイ、戦時日系人強制収容、戒厳令、自主的抑留、サンドアイランド抑留所、ホノウリウリ抑留所、面会制度、捕虜収容所

- |                            |                       |
|----------------------------|-----------------------|
| 1. はじめに                    | 5.1 面会による感情の動き        |
| 2. ハワイの強制収容の背景             | 5.2 物資の交換             |
| 2.1 真珠湾攻撃から強制収容へ           | 5.3 持ち込み物資の規制         |
| 2.2 「サンドアイランド」と「ホノウリウリ」の比較 | 6. 軍部の方針              |
| 3. 孤立して行く家族たち              | 6.1 面会制度の諸条件          |
| 4. ホノウリウリを訪ねた人たちの記憶と視点     | 6.2 「家族収容所案」却下        |
| 5. 抑留者たちにとっての面会            | 6.3 戒厳令撤廃と「ホノウリウリ」の変化 |
|                            | 7. おわりに               |

## 1. はじめに

1941年12月7日（現地時間）に日本軍による真珠湾攻撃を受けたハワイでは、その日のうちに戒厳令が敷かれた。「敵性外国人<sup>1)</sup>」扱いとなった日本人と「危険人物」とみなされた日系二世などの日系人の一部が逮捕・抑留され始めた。このハワイにおける日系人<sup>2)</sup>の逮捕・抑留は、アメリカ本土での戦時日系人強制退去・収容と比べてこれまでさほど焦点化されてこなかった。その理由として、アメリカ本土では1942年2月19日にフランクリン・ローズベルト（Franklin D. Roosevelt）大統領が行政命令9066に署名をし、約12万人に及ぶ戦時日系人強制退去・収容が行われたのと、ハワイでは抑留対象者の人数も約2,000人<sup>3)</sup>というその規模の違いが考えられる。また、アメリカ西海岸を中心に家族ごとあるいは地域ごとに収容されたことと、ハワイのように一部の選別された人びとが逮捕され、その後抑留されたという背景に違いもある。

ハワイの場合は、ハワイ諸島のそれぞれの地域で一旦抑留された人びとは、オアフ島のサンドアイランド抑留所、あるいはそこが1943年3月に閉鎖されてからはホノウリウリ抑留所に収容された。このオアフ島の抑留所より、さらに抑留者たちがアメリカ本土へ10回に渡り移送され、その中には軍政府の決定により移送をされた者と、自ら本土への移送を望んだ者があり、また希望者は、ハワイで抑留されずに暮らす家族と

ともに本土で収容されるという事を「選択する」こともできた。そのような経緯で、アメリカ本土で終戦まで暮らしたハワイ出身の抑留者と家族も少数ながらいた。一方、本土へ向かわずに、途中で釈放されるか終戦までホノウリウリ抑留所で過ごした抑留者もいた。

では、このような抑留者とその家族の体験はハワイの日系人史のなかでどのように扱われてきたのであろうか。ハワイの日系人強制収容の全体を捉えようとした研究は、1983年にデニス・オガワ&エバーツ・フォックス（Dennis M. Ogawa & Evarts C. Fox Jr.）が公文書をもとに収容の概要をまとめたものに始まる。アメリカ合衆国連邦政府の対日系人政策の仕組みをアラスカ、南米、ハワイと比較して捉えたテツデン・カシマ（Tetsuden Kashima 2004）と、日系人強制収容を法制史の視点から整理し、戒厳令下のハワイ軍政との関係も踏まえてこれを論じた山倉明弘（2011）の両者は、ハワイの収容の特殊性を、それぞれ独立した章を設けて分析している。また、権藤千恵（2008）は、日系人の逮捕・抑留がハワイで始まった時点から本土への転送までの経緯を整理した。小川真和子（2013）は、ハワイでの強制収容そのものが、人びとの記憶から消される傾向にあると指摘しながら抑留者の苦悩を中心に報告した。

以上の研究に共通するのは、戦時強制収容あるいは日系人強制収容という「事件」を、抑留

対象者の事前選別・逮捕・抑留・釈放などのプロセスとその背景に注目し、また抑留体験を彼らが受けた「被害」として重要視していることである。

その一方で、ハワイ日系人の歴史の中で日系人強制収容の持つ意味を分析した研究もある。ゲアリー・オキヒロ (Gary Y. Okihiro 1991) は、明治政府とハワイ政府の労働契約であった官約移民 (1885-1894) 以降のプランテーション労働の時代から始まる日系人に対する差別と反感の系譜の上で、日系人強制収容が執り行われたことを論じた。島田法子 (2004) は、この戦時強制収容が日系社会の構造の変化を引き起こし、文化団体、関係施設、宗教団体などの変容をもたらしたことを分析した。

このほか、ハワイの抑留所ごとにその差異を描こうとした試みや研究がある。パッツィ・サイキ (Patty Saiki 1982) が約60人の抑留者・陸軍当局・FBI (Federal Bureau of Investigation) を含む当事者へのインタビューをもとに日系人の抑留体験をまとめたフィクションのなかでは、ホノウリウリ抑留所に一章が割かれ、二世であるアメリカ市民が抑留されていたという特徴づけをしている<sup>4)</sup>。この著作の中でサイキは、ハワイ出身の日系人抑留者が体験した収容所生活をアメリカ本土やハワイ諸島の抑留所を網羅して描写した。また、戦時強制収容がハワイ全域で行われたことに着眼し、カウアイ島での事例を抑留所と地域の関わりを含めて検証したアラン・ローゼンフェルド (Alan Rosenfeld 2011a) の研究がある。

さらに、ジェフ・バートンとマリー・ファーレル (Jeff Burton & Mary Farrell 2007, 2008, 2010) を中心としたハワイ諸島の抑留所13カ所についての考古学調査は、オーラルヒストリーや公文書と関連づけることによりホノウリウリ抑留所の正確な位置だけでなく、その推測される全体像を提示した。この数年にわたる調査結果は、ハワイ社会で「語られてこなかった日

系人強制収容」についての歴史の共有化を目指そうとする社会運動や教育普及運動に詳細をもたらした<sup>5)</sup>。このように「ハワイの日系人強制収容」への関心が高まるなかで、ハワイ大学ウエストオアフ校における学際的な研究チームの調査は、ホノウリウリ抑留所を日系人抑留所としてだけでなく、第二次世界大戦において連合軍が戦争捕虜を各地の戦線から移送した収容所<sup>6)</sup>であったことも対象としている。このように、ホノウリウリ抑留所 (収容所) に関する洞察は深まりつつある<sup>7)</sup>。

ところが、抑留者とその家族を中心とした面会がこの山間部の抑留所で定期的に行われていたこと、またこの面会を介して、同所の内と外で「分断された抑留者と家族」がオアフ島という地域の中で戦時をともに生きる体験をしていたということは、これまであまり着目されてこなかった。確かに、アメリカ本土とハワイでのそれぞれの抑留体験を比較して、家族の役割を分析した研究<sup>8)</sup>のなかでは、「ホノウリウリ」での面会については事例として報告されているものの、面会そのものに着目されているわけではない。

以上の研究に欠けているのは、この面会を介して抑留者の家族による「ホノウリウリ」の内と外を行き来していた行為が、ふたつの世界をどのようにつなぎ、また変えていったのかという視点で彼らの体験を多義的に分析することである。さらに、「抑留者の家族」という偏見と差別に関するオーラルヒストリーと面会による体験の関係性も分析されてきておらず、家族からもたらされた物資が、抑留者にとっては生活の重要な部分を形成していたことも整理されてきてはいない。また、これらの面会の諸相に影響を与えた軍部の規制などに関する分析もされてこなかった。

本稿では、太平洋戦争下のホノウリウリ抑留所に収容されていた日系人と社会に残された家族の体験を、面会制度を軸におきながら「家族

が引き離されて同じ地区内に住む」という事態を当事者たちはどのように凌ぎ、またそこにおける面会制度が双方の体験にどう影響したのかを分析する。その際に、当時の日系社会で起きていた抑留者とその家族に対する差別、面会制度の抑留者とその家族への影響がうかがえる体験に着目する。さらに、離ればなれの家族が面会によって互いを認識する交流の場が戦時下に存在した意味と軍事的背景も考察するものである。

そこでまず、ハワイの日系人強制収容から概観し、ホノウリウリ抑留所の特徴にふれたうえで、面会という「場」で訪ねる側と訪ねられる側の体験を視野に、ここから浮かび上がる面会制度の詳細を整理する。さらに、本土への希望者の移住問題の事情と「ホノウリウリ」という場の捕虜収容所としての役割という二点から当時の社会的・軍事的背景の分析を試みる。

なお本稿では、当時の周縁に置かれた人びとの眼からみたハワイ社会への考察を深めるため、オーラルヒストリーを当事者の体験を分析する上で重視する。ここに参照・引用するオーラルヒストリーは、それぞれの体験者にとってこの日系人強制収容が持つ意味、また太平洋戦争下のハワイで執り行われた政策が作り出した人びとの体験を語るものだと考える。そのほかの資料として、体験や感情は体験者の随筆、短歌、詞、当事者への聞き取り調査をもとにしたノンフィクションにも反映されていることから、精査しながら参照する。

## 2. ハワイの強制収容の背景

### 2.1 真珠湾攻撃から強制収容へ

ハワイでは、1941年12月7日午前7時57分（現地時間）に日本軍による真珠湾攻撃を受け、ハワイ知事ジョゼフ・ポインデクスター（Joseph B. Poindexter）が「ハワイ布告<sup>9)</sup>」を同日午後4時25分に発令し、早急に戒厳令が敷かれた。この時点より、ハワイ軍政府が樹立し、軍政府長官の逮捕状とともに日系人を主眼に置いた逮捕と

それに続く対象者の抑留がハワイ諸島全域で始まった。

この日本軍の攻撃が引き金になったものの、逮捕対象者と一連の逮捕・拘引計画については、すでに計画されていた事が近年の研究で明らかになりつつある。1935-37年には陸軍情報局により、日米開戦となった場合の日系社会の有力者・知識人などを拘留するための草案が作られていた。続いて1939年からホノルル支局を設立していたFBIがこの動きに加わり、すでに約1,500名の「危険人物」のリスト化が終わり、その詳細な手順までが決まっていた（Okihiro 1991: 173-85; Kashima 2003: 67-73）。真珠湾攻撃とそれに続く戒厳令施行により、ハワイ軍政府がこのリストに基づく一斉逮捕を要請し、FBI、地元警察、ならびに海軍情報局が実働力となった（山倉 2011: 99）。なかには、この一斉逮捕の後に釈放された者もいたが、逮捕された人びとはオアフ島では移民局、ハワイ島ではキラウエア軍事基地、その他の島では地元の警察署などで予備審問を受け、3人の民間人から構成される審問委員会を経て、抑留か釈放と勧告を受けた（Kashima 2004: 68-70; 山倉 2011: 99）。抑留処分となった人びとは、オアフ島では移民局での数日間の拘留後、12月9日に設営された仮設的なサンドアイランド抑留所へ収容された。このように、ハワイの日系人強制収容は、事前選別をされた一部の日系人が逮捕され、審問の後に抑留されるプロセスであった。つまり、家族ごと居住地から強制退去の後に収容所に移送されたアメリカ本土の西海岸を中心とする強制収容とは違う背景を持つ。

ハワイで逮捕・抑留された人びとの内訳は、僧侶、牧師、日本語学校教師、邦字新聞記者、領事館職員などの日系社会でリーダー的な位置にいた人びと、ラジオ無線を持っていた漁師、日本で教育を受けて帰国したハワイ生れのいわゆる「帰米二世」などが主体だった。さらに女性の抑留者も7名ほどいた<sup>10)</sup>。以上の対象者には



ふたつの「名目」があったが、まず、「敵性外国人」としての日本人、ドイツ人、イタリア人など、そして「危険人物」としての日系二世を含むアメリカ市民を含んだ。12月7日から9日までに、473人—日本人345人、日系二世22人、ドイツ人74人、ドイツ系アメリカ人19人、イタリア人11人、さらにイタリア系アメリカ人2人—が逮捕されている（Kashima 2003: 68–70）。ハワイの戦時強制収容における抑留者の内訳は日本人・日系人が全体の77%とその大部分を占め、そのほとんどが男性であった。

また、抑留者の収容施設間の移送も行われた。ハワイ諸島内では、抑留処分となった者はそれぞれの島で拘禁されていたが、1942年の春よりハワイ諸島全域からオアフ島の抑留所に移される。1943年3月まではサンドアイランド抑留所へ、それ以降ならホノウリウリ抑留所へと集められた。それに先行して行われたのが、オアフ島からの本土の抑留所・転住所への移送であった。1942年2月14日発行の『ハワイ報知』によると、陸軍当局はハワイで収容している「適性外国人」をアメリカ本土へ移送すると発表した。以降、合計10回にわたり約1,900名の抑留者が、アメリカ本土へ転送されていった<sup>11)</sup>。このうち、第9回（1943年7月1日）と第10回（1943年12月2日）はホノウリウリ抑留所より出発している（古屋 1964; 権藤 2008）。

このなかには、自主的に本土へ移動した抑留者の家族などが約1,000名いる（Niiya 2010）。これらの人びとは、夫あるいは父親の拘留により経済的に困窮し、自らアメリカ本土の転住所・収容所に赴くことでその夫や父親たちとともに暮らす「自主的抑留」<sup>12)</sup>（Voluntarily Interment）を選んだ。1942年11月23日には抑留者だけではなく、希望した107名の家族がホノルル港から船で本土へ向かった<sup>13)</sup>。このようにして、1943年3月まで1045名の家族が本土へ移動しており、彼らの多くは本土で抑留所などを転々としながら「家族収容所（family camp）」と呼ばれた家族向

けの収容施設に落ち着き、そこで終戦までを過ごすか、あるいは戦時交換船で日本に帰国するという選択があった（権藤 2008）。

1943年3月、サンドアイランド抑留所はホノルル港に隣接されていたため、軍備拡張のための埋め立てが理由<sup>14)</sup>として閉鎖され、抑留者たちは新設されたオアフ島内陸部のホノウリウリ抑留所へ移送される者と、本土へ移送される者に分けられた。この時、日系人抑留者同士が話し合いで決めた115名が1943年3月2日にホノルル港を出発している。そして、残った抑留者64名が武装したトラックでホノウリウリ溪谷の奥へ移送された。谷奥では、まず草刈りをして自分たちの居場所を作らなければならなかったという（西川 1981）。そのようにして、ホノウリウリ抑留所が開設された。

## 2.2 「サンドアイランド」と「ホノウリウリ」の比較

日系人や他の抑留者を拘禁するためにサンドアイランド抑留所が使用された時期（1941.12.10–1943.3.1）と、ホノウリウリ抑留所が使用された時期（1943.3.1–1945.8.14頃）ではそれぞれが戦時において別の役割を持っていた。このふたつの施設の違いは、しばしば、ホノウリウリ抑留所が新設され、サンドアイランド抑留所が閉鎖されたという説明に収斂される<sup>15)</sup>。しかし、太平洋戦争が進むにつれて変化したハワイ軍政府の動きと戦局は、日系人などを収容するための抑留所が交代したという以上の意味を含んでいた。それは、「ホノウリウリ」に一番多い時期で約320名いたとされている日系人抑留者が、徐々に釈放されていき、一方、この戦争を通じて累計約16,000人の戦争捕虜が収容されていったことでもある。これを「ホノウリウリ」の捕虜収容所への転機（“Transition into POW Camp”）と考える見解もある（Rosenfeld 2011b）。この戦局による「ホノウリウリ」への影響については後述する。

さらにこれまで、「サンドアイランド」と「ホノウリウリ」の比較は断片的に報告されてきており、特にそれぞれの抑留所では、抑留者の市民権の違いが言及されている (Scheiber et al. 2009; Rosenfeld 2012)。すでに述べたが、抑留対象者の逮捕・抑留が始まった時は、主に日系一世 (日本人) のコミュニティのリーダー格とみなされた人びとが「サンドアイランド」に抑留されていった。そして、1943年3月の「ホノウリウリ」が開設されたころには、これらの一世は「敵性外国人」扱いの下にその多くがアメリカ本土の抑留所にすでに移送されていた。

これと並行して、1942年の後半からハワイ情報局は、ハワイ諸島中のまだ逮捕されていない全ての帰米二世を拘留目的につき調べていた (Kashima 2003: 81)。この背景には、帰米二世とは、日本で日本語教育と軍事訓練を受けている「最も危険なアメリカ市民である日本人」だと軍の報告書に表記されていることが挙げられる。(Office of the Chief of Military History d.u.: 20)。しかし、この件に関しては、ハワイ軍政府に連邦政府が勧めた日系人の集団収容を避けるために帰米二世を調査し逮捕し続けたという見解もある (山倉 2011: 89)。いずれにせよ、抑留対象者が時間の経過とともに「敵性外国人」である一世から「危険人物」とみなされた二世に変わっていった。したがって、1943年3月以降に、「ホノウリウリ」に新たに抑留されていったのは、帰米二世を含む日系二世が多かった<sup>16)</sup>。

また、ふたつの抑留所を比較して、真珠湾攻撃直後の管理体制より、「ホノウリウリ」の方が緩和されてきていたと複数のオーラルヒストリーからいわれている (Saiki 1984; Okihiro 1991; Kashima 2004)。しかしここでは、これまであまり着目されていない所内における外部との接触の可能性を比較してみたい。

両方の抑留所を経験している抑留者の中には、家族との面会は、ホノウリウリ抑留所の方で行われたと記憶している人びともいる (Saiki 1983:

183)。確かに、面会に関するオーラルヒストリーの量を両所において比較すると、「ホノウリウリ」に関する体験がかなり多い。したがって、面会という制度の下でより人びとの往来があったホノウリウリ抑留所は、「外界」から完全には切り離されていなかった場所とみることができる。

ただし、サンドアイランド抑留所でも、ある程度の面会が許可されていたと思われ<sup>17)</sup>、ドイツ系アメリカ人で当時12歳の少女だったドリス・ナイ (Doris Nye 2009) は、抑留されていた両親に会いに度々通ったという。またラムゼイ・モリ (Ramzey Y. Mori 2012) も両親に会いに行った時に見た、テントの周りに掘った貝を積み上げて暮らしていた人びとの生活を記憶している。とはいえ、社会から隔離されてしまった抑留者たちが社会のどの位置にいたのか、またその家族の抑留者を訪ねるといった行為の持つ意味を複数のオーラルヒストリーで分析するために、ここではホノウリウリ抑留所での面会に光をあてる。

### 3. 孤立して行く家族たち

真珠湾攻撃後のハワイ社会では、日系人は当時のハワイ人口の約37パーセント<sup>18)</sup>を占めていた。しかし、他のエスニックグループから攻撃への手助けを日本軍にしたのではないかと疑われ、様々な噂も飛び交った (Okihiro 1991; 島田 2004)。さらにFBIによる逮捕者の拘引が始まると、抑留された者の家庭は日本のスパイだと疑われ、また彼らに接触する事により自分たちも抑留されることを危惧して避けられる場合もあり、残された抑留者の家族たちは日系社会のなかで孤立していった (Hazama & Komeji 1986: 134)。この体験は本土へ「自主的抑留」をした抑留者の家族にも共通していると思われるが、このような孤立感や経済的疲弊からアメリカ本土へ向かったのか、そのまま終戦までハワイへ残ったのかはそれぞれの状況と選択によった。まずふたつの事例から、真珠湾攻撃後のハワイ

ではどのように抑留者の家族が孤立していったのかその状況を概観する。

マサミズ・キタジマ (Masazumi Kitajima) は、マウイ島の仏教寺院の僧侶だった父親が抑留された後の出来事についてインタビューに答えている。全ての日本人の檀家が家にも寄り付かず、寺にも来なかったことが最初に起きたという。その後、経済的にひっ迫した状況と当時の様子についてこのように回想している。

私たちはお金がない、なぜなら父や母は法要をしてお布施をもらっていたから。それが彼の給料で、彼はもういない。母がどこかに行き食べ物を買って来て、それで生きられた。決して人びとは家に来ない、でも時々雑貨が届けられる。多分、人びとは関わることで巻き込まれること避けていたのだと思う (Kitajima 2011) (拙訳)。

キタジマが学校に行くと、クラスメイトたちは父親が抑留されたことを知っていた。それを聞いていたハワイアン先生はキタジマの家族を家に食事に呼び、食べ物を届けて助けてくれた。その先生には頼り切れないという思いからか、母親が本土へ行くことを決める。一方、そのハワイアン先生になぜ彼女だけが手を指しのべるのかと尋ねたところ、彼女たちハワイアンに、日本人(日系人)がいったい何をしてくれたのか、という答えが返ってきた<sup>19)</sup>。彼女からみると、日本人(日系人)はハワイアンを助けてくれたことなどなかったような返答であり、また、キタジマ家の日系人社会での孤立はあたかもそのコミュニティの底辺にいたように見えたことが想像できる。

しかし、キタジマは「なんとか生き残れば本土には行かなくてもよかった。でも行くしかなかった」(Kitajima 2011)と語る。この時、公共の救済措置として赤十字が助けてくれたこともあった<sup>20)</sup>が、持ってきてくれた「食べ物」に

ついてキタジマは、「あんなに大きな灰色のアメリカのチーズは見たことがなかった。カビだら[ーけ]のチーズ(笑)<sup>21)</sup>」(Kitajima 2011)と述懐している。

キタジマの家族と同様に、フローレンス・ワカモト=デビットソン (Florance Wakamoto Davidson) も、父親(若本儀一)<sup>22)</sup>の抑留にともない、母親が孤立していくのを観察している。父親は、1943年9月8日-10月28日ならびに1943年12月18日-1944年11月1日の2期間にわたり抑留された。一度は仮釈放されたが、後に陸軍防諜部隊が捜索に来た時に自宅から見覚えのない日本の国旗が見つかり<sup>23)</sup>、再度抑留、仮釈放というプロセスを踏んだ。そして1945年の9月に監視付きの仮釈放身分から解放され「釈放」となった。この間の家計の切り盛りは、母が父に代わって家業のクリーニング店を営み、抑留者の妻たちも雇っていた。

母は生き残るためにお金の必要な女性たち、ほとんどは小さな子供がいる主婦か抑留者の妻たち、を助けた。父の留守中に女性の友人で彼女が信頼出来るのは抑留者の妻たちだけだと感じていた。息子が従軍していた古い友人からは違ってしまいました、父の抑留が理由で彼女たちに避けられていたと感じていた。彼女の唯一の慰めは、ホノウリウリでの面会日だった。毎回彼女は様々なものを持って、父に会いに行った (Hawaii Nikkei History Editorial Board (Ed.) 2012: 109-110) (拙訳)。

これらの事例からわかる当時の日系社会は、世帯主が抑留された家庭を避ける傾向があったようだ。それゆえ抑留者の家族は、戦時下の生活において関わるべき人の輪を再編成せざるをえなくなったことがうかがわれる。すでに述べたが本土へ「自主的に」向かうのか、ハワイで耐えるのかの選択を日々迫られた家庭もあった。一方で、父親がスパイだと疑われるのではない

か、という思いから父親の抑留について、通っていた高校では口にしなかった生徒の事例も報告されている (Tsuru 2014: 147)。このような緊迫したともいえる時間を過ごした抑留者の家族にとっては、彼らの社会における孤立より「唯一の慰め」として、面会に出かけようとする気持ちがあったのであろうか。

#### 4. ホノウリウリを訪ねた人たちの記憶と視点

ここでは、母の名代で父親を「ホノウリウリ」を訪ねた前掲のワカモト＝デビットソンの体験から、面会者にとっての面会が何を意味するのか分析を試みる。

長い道のりをカネオヘ (オアフ島東部の町) からタクシーに乗りダウンタウンへ行き、キング通のカメハメハ像<sup>24)</sup>の前からホノウリウリへ面会者を運ぶ陸軍のバスに乗った。バスは、リーワード (オアフ島西部) からさらに隔離された場所へと入って行き、有刺鉄線とガードに囲まれたテントが現れると涙がでた。カーキ色のパンツとノースリーブのTシャツ姿の父を見て、泣きだしてしまった。(中略) 食堂での面会中を泣き通した。(中略) 父親はついに優しい口調で、もう訪ねてこないように、と言った (Hawaii Nikkei History Editorial Board (Ed.) 2012: 109-110) (拙訳・括弧内筆者加筆)。

この時の辛い経験は、ワカモト＝デビットソンの場合、面会だけで感じた事ではなかった。当時22歳であったが戦時につき自分の意志で学業を中断した彼女は、アメリカ人としての「協力」を示そうと連邦政府関係の仕事に就いていた。しかし、彼女の職場に度々 FBIが訪ね、彼女や両親のアメリカへの忠誠心などを尋問していた。その後、彼女の父親が抑留された。戒厳令下の戦々恐々としていた日系社会の中でアメリカへ

の忠誠を疑われていたワカモト＝デビットソンにとっては、「ホノウリウリ」にいた父親の姿に自身の経験も重なり屈辱感さえ感じたのではないだろうか。

スーザン・アドラー (Suzan M. Adler 2014) が2011年に行った調査では、エレーン・フカダ (Elaine Fukada) により日本軍による真珠湾攻撃を目撃したこと、またその後の軍の指揮下に日常生活が送られていく体験が語られている。当時14歳だったフカダは、父親に会いに「ホノウリウリ」を母と弟とともに軍用のバスで訪ねた。彼女の記憶では、何人でも一緒に出向く事はできたのだが、いくつものゲートを越えてようやく軍用地に着くと、憲兵がバスに乗り込み、一人ひとりが名前とともに確認された。その時の経験は、彼女にとって恐ろしいものであったことを覚えている (226)。このような緊張をともなう移動などを含む面会は、家族にどのような影響を与えたのであろうか。

ワカモト＝デビットソンやフカダの体験に類似した軍のバスによる送迎があったという証言のなかには、軍の管理体制が最も厳しかったと思われる時のものもある。2013年に、ハワイ文化センター (Japanese Cultural Center of Hawaii 以下JCCH) が行ったホノウリウリ抑留所跡地の見学に参加したりリアン・ニシ (Lillian Nishi) を案内したこの教育普及で草分け的な存在であるボランティア、ベッツィ・ヤング (Betsy Young) によると、ニシにとってこの日は、過去の記憶の再確認となったようである。

ヤングらは、年に数回の見学会を行っている。その日も、ホノウリウリ抑留所跡地見学会のプログラムの最後に、参加者たちは現地で感想を述べた。その際ニシは、6歳の時にホノウリウリに抑留されていた叔父を訪ねて、家族と軍用のバスで来たこと、抑留所手前の軍用地に着いてバスが止まると、憲兵が乗車していた人びと全員に目隠しをしたこと、そして溪谷に向かい、バスが溪谷の奥から坂を上りながら戻る時は、



再び目隠しをされて乗ってきたことをほかの参加者の前で語ったという。ニシの記憶のなかでは長い間、彼女が訪ねた場所については不確かなものであった。そしてこの過去の訪問についてニシは、

——本当にあったことなのか、夢をみたのではないかとわからなかった。しかし、今日こうやってツアーに参加して実際にこの場に来て、本当だったのだと思い、感無量になった——

と述べた、とヤングは語った（2013年8月13日筆者によるインタビュー）（拙訳）。

ニシの記憶は、戒厳令下の抑留所への軍による送迎が厳しく規制されていた事を示す証言である。その後70年間に渡り、この出来事をニシが確認できなかった戦後のハワイ社会の風潮については疑問が残るものの、これまでみてきたようなオーラルヒストリーからは、軍の送迎バスなどで「ホノウリウリ」へ出向くことが可能だった者にとっては、たとえ子供でも緊張に耐えながら、大抵は世帯主だった抑留者に面会に赴いていた様子がうかがわれる<sup>25)</sup>。

これらの体験を生んだ背景は、ホノウリウリ抑留所が外界との接触を持ちえた地理的な要素も大きい。「サンドアイランド」からアメリカ本土へ転送された抑留者の家族と違い、その家族を隔てる距離は、オアフ島に限ると、抑留所へ訪ねるのは可能な程度であった<sup>26)</sup>。溪谷の中で周囲からは見えない立地条件ではあったものの、ホノウリウリ抑留所の位置はオアフ島クニアという、ホノルル市のダウンタウンから車で30分程の内陸地に設営されていた。いわば、同じオアフ島という地域の中に「特殊な場所」があったのだ。当時ここを訪ねた抑留者の家族は、おそらくは出来る限りの準備をして面会に臨んだのであろう。この家族の尽力については後述

する。

## 5. 抑留者たちにとっての面会

### 5.1 面会による感情の動き

まず、抑留者の「ホノウリウリ」での生活を、彼らの置かれた環境とともに概観したい。

ホノウリウリ抑留所での生活は、抑留者にとっては、快適というものではなかったといわれる。彼らは、バラックと呼ばれた木造の小屋に、6人から8人が暮らし、そこには二段ベッドが4つ備わっていたという。バラックごとに軍隊形式に組織され、部隊長などを中心とした班で行動し、朝礼などもあった。洗濯物を減らすため、また湿地帯の気候にあわせるためにランニングにショートパンツだった者も多い（田坂 2001年8月28日鈴木によるインタビュー）。それでも、オーラルヒストリーによると、日系人抑留者の居留区域内に売店、歯医者、オフィスなどがあり、他の区域よりも設備が整っていた（Nye 2009）[写真1]。

強制的な労働はなかったが、代表としてキッチンで大勢の食事を作る係や抑留所内での仕事をした場合には、一時間あたり10セントの給付があり、食事はメスホールと呼ばれた1,000人が座れるような巨大な食堂で同時に取った（Rosenfeld 2011b）。抑留者たちは持て余した時間を有効に使おうと、趣味や工作に没頭した者もいた。また、希望者を募り「野菜部隊」と呼ばれた野菜を作る班も編成され、軍が用意したバロニーという羊の肉ばかりの食事に閉口していた日系人抑留者たちは、野菜を得ることで食欲を回復したという（田坂 1981: [6]; 鈴木 1981: [7]）。これらの証言から陸軍側がある程度の自主制による集団生活を日系人抑留者に営ませていたことが推測できる。そして、抑留生活のなかで面会が定期的に行われていたが、抑留者にとっては大きな感情の動きを誘う機会だった。

田坂養民（ジャック・Y・タサカ）<sup>27)</sup>は、幼少時に日本に両親と帰り、1937年にハワイに戻っ



写真1 “Honouliuli Camp Barracks & Tents” ca. 1945–1946

Photograph by R. H. Lodge. Courtesy of Japanese Cultural Center of Hawai‘i / Hawaii’s Plantation Village Collection.

中央右側の大きな建物が面会の行われた食堂（mess hall）であり、橋の手前中央から右下へ連なる小屋のある区域には日系人抑留者たちが暮らしていた。

てから差し当たりの仕事として日本語学校で教鞭を取っていたが、太平洋戦争開戦後にFBIの再三の尋問を受けることとなる。そして、1943年4月3日–1944年9月23日まで「ホノウリウリ」に抑留されていた。田坂によると、面会に来てほしい者や家族や知人に面会パス<sup>28)</sup>といういわゆる事務室から渡される「許可証」を送って来てもらったという。そして面会者は指定の場所に集まり、「貸し切りバス」でホノウリウリに運ばれてきた。面会は日曜の午後に行われたが、頻度については月に1回、2週間に1回など諸説ある<sup>29)</sup>。抑留者の面会に対する姿勢は様々であり、取り乱すのを恐れ敢えて面会を避ける者、また家族や知人へ検閲が及ぶのを恐れて面会を忌避する傾向もあった。また抑留された家長の代わ

りに労働に明け暮れ面会に来られない家族もあった（田坂1981: [6]）。

このような抑留者の心情を描写した短歌と歌の作詞を三点参照し、そのように個々の事情により多様性のあった面会の側面をみてみたい。まず、村田要人は以下のように詠んだ。

笑う人 涙うかべて  
物言わぬ人 様々なり  
面会の日々（JCCH c）

また、川添樫風<sup>30)</sup>によって作詞された『監禁小唄』という抑留者のなかで流行った歌のなかには、このような節がある。

待ちに待った面会日 積もる話に時過ぎて  
 父さん帰るとせがむ子の 頭なでなで目がう  
 るむ (田坂 1981)。

もうひとつ、このような吉本浅美による「安  
 来節」の替え歌もあったようだ<sup>31)</sup>。

ホノウリウリの地獄谷<sup>32)</sup>  
 今日は楽しい面会日  
 晴れの姿に威張れ共

日毎に心乱れ勝ち  
 積もる話(ママ)もあとや先き  
 今宵も□□の夢を見ん  
 (平和カ) (JCCH c)

ここに詠われたのは、抑留者にとっては楽し  
 いばかりではなく心が乱れる面会の側面であり、  
 抑留所での面会は、家族の側だけでなく抑留者  
 にとっても苦痛をとまなう体験だったことが理  
 解できる。そのひとつの要因は、歌にもあるよ  
 うに、時には子供に父親に帰ろうと泣きつかれ  
 ると、彼らはその場にいる不条理をみつめ、い  
 わば「やるせない」感情が湧いたからではない  
 だろうか。タサカ (田坂) によると、面会が終  
 わるころになると、子供のいた抑留者を残して、  
 子供のいない若い抑留者などは、さっさと食堂  
 を引き揚げたという。その理由については彼ら  
 の「男泣きをみたくはなかったもの」(Tasaka  
 2003) と回想している。これらの事例から、こ  
 の「ホノウリウリ」での面会は抑留者にとっ  
 ても家族と同様に、楽しい時間でもあり辛い時  
 間でもある体験であったことがみえる。

## 5.2 物資の交換

これまで抑留所での面会が様々な側面を含ん  
 でいたことをみてきたが、ここでは不自由な抑  
 留所生活では得られない物資が抑留者に届けら  
 れたことにも着目したい。特に面会者によって

もたらされた物資が抑留者の生活に与えた影響  
 をみてみたい。

例えば、「ホノウリウリ」では楽器が弾かれて  
 いたという証言がある。ここでの生活が始まっ  
 た頃は、大きなハムの缶に針金でギターを作っ  
 ていた抑留者だが、後に持ち込まれたバイオリ  
 ンを練習し、三味線を弾いて宴会をした逸話も  
 残る。時間を持てあましていた抑留者たちは、  
 これらの楽器の他に、工作などの工具や材料や  
 囲碁、将棋、麻雀なども面会者に持参してもら  
 っていた<sup>33)</sup>。

また、面会としてではないが、抑留中の父親  
 に下駄作りの材料や道具を乞われて届けた話も  
 残る。ユタカ・イノクチ (Yutaka Inokuchi) に  
 よると、1944年5月に起きたウエスト・ロッジ海  
 軍基地での爆破事件を、いわば口実に、FBIが  
 サトウキビ・プランテーションの資産管理の仕  
 事をしていた父親 (井口確二) を逮捕し、抑留  
 した。イノクチは、電気技師のアシスタントと  
 して冷蔵庫等の設置にホノウリウリ抑留所に  
 通った時に父親に会っていた。彼は徴兵検査の  
 身体検査で不合格になった後、防衛関係の仕  
 事に応募したが、父親が「敵性外国人」という理  
 由のために不採用となる。しかしその後、弟が  
 徴兵された。軍は自分だけを不採用にしたこと  
 に異議申し立てをすると、軍が彼を採用した。

そして、オアフ島西部のリーワードが配属区  
 域の電気技師の助手となり、訪ねた場所のひと  
 つが抑留所だった。ここに仕事で通ううちに、  
 当初はキャンプ内部の食堂付近に入れてくれな  
 かった監視の憲兵に、父親がいると話したとこ  
 ろ、彼の許可の元にフェンス越しに父親と話し  
 たという。ここから、物資の交換がはじまる。

父親は、様々な物を持たせてくれたが、なか  
 には巷では配給制で市民が入手しにくかったバ  
 ターがあった。日系人はバターの使い方を知ら  
 なかったからか、抑留所では余っていた。一方、  
 イノクチが父親に届けた物は、母親が余分に  
 作って持たせたおむすびとぼろ布などだった。



彼らは木の下駄を作っていて、その布は鼻緒<sup>34)</sup>を作るのに必要とされた。ハンマーやノミなどの道具も下駄を作るのに持って行った。憲兵は見ていたが、特にとがめなかったという。イノクチは、父親には仕事で会えたので、遠慮をしたのか、日曜の通常面会には、母と妹が行った<sup>35)</sup> (Inokuchi 2012)。ところで、イノクチの父は、抑留生活を通じて憔悴した様子もなく終戦とともに帰ってきたというが、前掲の抑留者たちにある程度の自主性を与える食事の管理や、野菜作りと関係していたのだろうか。

イノクチの父親からのバターの件だけでなく、抑留所からもわずかだが物資が面会者に「お土産」のように渡っていたことは、野菜作りの結果、家族にからし菜を持たせたという逸話からもわかる。この時は、全て配給制だったため、喜ばれたという (鈴木 1981)。これらのオーラルヒストリーから、抑留者と面会に来た家族は、食べ物や野菜などを交換して不自由な抑留生活や、配給制の戦時下の生活を少なからず助け合っていたことがわかる。しかしそれとは別に、抑留者から家族へ特別な手作りの品が渡されていた。この意味について日本兵捕虜による回想と、抑留者の家族のオーラルヒストリーから分析してみたい。

豊田穰は、日本兵捕虜としてホノウリウリ抑留所に2ヶ月程収容されていた時の回想を交えて、1979年に「地獄谷収容所」という小説を書いている<sup>36)</sup>。それに先行する1972年の随筆でも日系人抑留者と家族の面会の場面を描写しているため、この小説は実際の体験がもとになっていると思われる。豊田によると、1943年10月中旬から他の日本兵捕虜11名とともに、ホノウリウリ抑留所に送られ、そこでは、川に沿って建てられた木造のバラックの一番奥にあった大きな食堂の横の小屋に入れられた。そのうち、食堂で日系人抑留者たちの食事の様子を観察するのだが、その後の日曜日に、さらに大勢の女性が連なって食堂に入っていくところを見ていた。

女性たちが着座したあと、男性たちが食堂に入ってきた様子は、以下のようであった。

女たちは盛装に近いが、男たちは簡素な服をつけており、それが収容所の住人であることがわかった。男たちは手に手にリボンのついた箱を持っている。思い思いのテーブルに男たちが近づくと、「パパ!」「ダーリン!」という小さな叫び声があがった (中略)。私はやっと了解した。女たちはホノルル市街に残された妻子であり、週に一度か月に一度、面会を許されて、この地獄谷に来るのである。迎える男たちは、労働で得た少額のドルで、玩具などを買い<sup>37)</sup>、それを主として子供に贈るのである (豊田 1979: 86)。

観察者の眼に映る「盛装した」妻たちのこの時の様子と「リボンのついた箱」は、両者にとって月に1-2回程度の面会が特別な時間であったことを伺わせる。また、クリスマスが近づいた時にも抑留者の間には「妻や子供に贈るクリスマスプレゼントとして、木の魚や馬などを彫っている者もいた」 (豊田 1972: 312-320) との描写がある。

「ホノウリウリ」では、クリスマスではなくとも、貝で作ったネックレスや歯ブラシの枝で作った指輪などを工作して面会に来る家族に渡していたといわれている<sup>38)</sup>。なかには、下駄などを作るのが上手な人がいて、抑留者は配給制で得られるクーポンでその下駄を購入して、面会日の土産としていた (Tasaka 2003)。このように家族によって材料が持ち込まれ、所内で加工されたものがまた家族に渡った場合も含めて、土産を用意して面会者渡すという行為は、彼ら抑留者の生活を活性化させる側面を持っていた。

### 5.3 持ち込み物資の規制

しかしこれらの物資の交換に関しては、規制もあったようだ。例えば、音楽学校で教鞭を取っ



ていた抑留されたハリー・ウラタ（浦田実）は、面会の時に魚の干物を隠して家族に持って来てもらい、抑留者仲間に見せびらかして食べたという嬉しかった体験を語ったインタビューにおいて、「娯楽の気分を味わった」（鈴木 1991: 39）と表現している<sup>39)</sup>。また、抑留者たちが密造酒を造るためのイーストは秘密裏に家族に持参してもらっていた（田坂 1981: [9]）<sup>40)</sup>。

このような面会による禁止物資の流れは、ある程度黙認されていたようではあるが、前掲のイノクチの回想にもあるように、それは、憲兵などの判断による状況次第だった可能性もある。それを示唆する事例がある。ラムゼイ・ヒシヌマ（Ramsey Hishinuma）にとっては、高校の卒業式に母親と兄弟が突然出席できなかったことがあった。ヒシヌマの家族は、先に父（菱沼甚重郎）の面会を訪ねていたホノウリウリ抑留所での持ち込み品の抜き打ち検査で足止めを食らい、ヒシヌマだけが参列者がいなかった卒業式となった。その頃、抑留所内では日系人抑留者に限らずイタリア人などの抑留者たちも密造酒を造り、昼間から飲酒していた者もいたという（Hishinuma d.u.）。よもや抑留所内で作られていたとは考えなかった憲兵たちは、この時面会の家族を疑った。

これらの事例は、抑留所に面会に赴くという行為について、軍部の検査などと隣り合わせの緊張感を抱く行為でもあったことを示している。それはその時々の憲兵等の判断で、面会者たちは優遇されることも冷遇されることにもよった。軍部の管理下で行われていた面会は、時として悲しい記憶と状況の不幸さを当事者たちに通感させた。

しかし抑留者にとっては、楽器や道具、食料などが面会者によって抑留所内に持ち込まれることにより、彼らの生活を盛り上げ、気持ちを解放することもあり、面会はまさしく、「一番の楽しみ」（Tasaka 2003）となっていた。そのためか、時としてリスクを犯してまでも、家族は

禁止された物質さえ持って行ったのである。

## 6. 軍部の方針

### 6.1 面会制度の諸条件

これまで面会制度を概観すると、少なくとも抑留者とその家族にとっては、軍部により「保証されていたシステム」であったことがみえてくる。しかし、この面会制度が作られた背景は明らかになっていない。そこで、その「保証」と表裏一体だった面会の諸条件を、これまでの抑留者と面会者の体験から分析することで、軍部の面会に対する方針を推測する。

ここでは、これまでの分析を踏まえて、「面会そのものの実施についての条件」があったというオーラルヒストリーについて検証してみたい。この点は、管理側の軍部は面会制度を行えばトラブルが少ないと考えていた、または、問題があると面会は中止された、という証言から交換条件の存在をうかがわせるため重要である。前掲のサイキ（1982）「ホノウリウリ——市民のための抑留所」（“Honouliuli: Camp for Citizens”）のなかで、抑留者同士の会話に条件として現れる。先に抑留されていた者たちは、新しく連れて来られた者たちに向かい、トラブルを起さないように諭す。この物語での日系人抑留者たちの言葉を借りると、

喧嘩をすると俺たちはみんな家族と会えなくなる。一人のおかげで月に一度の面会で妻や子どもたちに会えなくなったら、俺たちがその一人をどう扱うかわかるか。問題があったら、部隊長（Barrack Leader）に話せ（189）（拙訳）。

むろん、これはフィクションのなかで脚色された台詞ではあるが、この著作のための聞き取り調査の記録には、前掲のニシカワが「喧嘩を起すと面会がなくなるので、新しく入って来た抑留者にはそれを教えなければならなかった」

(Saiki d.u. b) と証言したことが残されている。そのような可能性があったとすれば、喧嘩に罰則を付けて面会を条件化することにより、軍部は面会を利用していったことになる。そしておのずとまた、抑留者の行動も相互に抑制する力が働くことで規制されていったと考えられる。この保証された面会システムにも、その定期制とは裏腹に、いつ停止するかもしれないという緊張感があったのではないだろうか。

さらに続いて、軍部のこのシステムの背後に関係していた可能性のある家族の移動問題も絡めて分析し、軍部が面会を執り行っていた他の要因を探る。

## 6.2 「家族収容所案」却下

くり返しになるが、ハワイの日系人抑留者とその家族のあり方を整理するうえで指摘したいのは、当時、家族で暮らせる本土の抑留所などに行く事ができない人びとがあり、また「ホノウリウリ」でも家族はともに暮らせなかったことである。というのも、抑留者の家族は、前掲の本土への「自主的抑留」を選択することはできたが、1943年3月を最後に本土行きの大規模な移送はすでになく、希望者には国際赤十字を通じて手続きがされていた (Allen 1950: 149-150)。ただし、家族そろっての本土の転住所での受け入れ申請は、上手く家族に巡り会えないなどの問題も含んだ。例えば、ハワイ島ヒロから抑留された尾崎音吉とその家族は、手続きの複雑さと情報の錯綜などに翻弄され、アメリカ本土の抑留所などを互いに転々として一年以上も合流できなかった (Ed. Honda 2012: 125-176)。

これらの本土での「自主的抑留」の状況が、戒厳令下の情報統制のあったハワイへは伝わっていたのかどうかはわからない。しかし、本土への移住希望者がいる限りは継続的な軍政府の懸案事項でもあった。「自主的抑留」の要望がある家族に関しては中立国のスウェーデン副領事を介して取り扱いが続いており、これらの要望

に応じて、軍政府は申請書類の手続きをする業務もあったからである (Slattery 1943)。

ルイス・スプリンガー陸軍少佐 (Major. Louis Springer) からの1943年11月 (日付不明) の連邦政府側への通信文がある<sup>41)</sup>。それによると、テキサス州の2カ所の抑留所について考慮した場合、家族収容と成人のみのいわば「単身収容」にはそれぞれの問題があり、ハワイで家族収容を実施するのならば、別途に家族のための抑留所を設営すべきだという見解が述べられている。ところがスプリンガーは、ホノウリウリ抑留所では、学校や遊び場を含んだ家族抑留区を内設する面積は確保できないので、ハワイでの家族収容は現実的ではなく、本土で抑留者の家族を受け入れる方が実務的であると主張している。その理由として、当時、増加を見込んでいた戦争捕虜と減少していた抑留者の数の兼ね合いを挙げている (Springer 1943)。

すでに述べたが、日系人抑留者は最大時でホノウリウリ抑留所に約320人いたとされたが、この1944年10月24日の時点で117名に減っている (Office of the Chief of the Military History: 22)。ところが当時「ホノウリウリ」という場合は、太平洋戦線から大勢送られて来る戦争捕虜のために用地を確保している必要性があり<sup>42)</sup>、「捕虜収容所」と「敵性外国人ならびに危険人物の抑留所」のふたつの役割を維持しなければならなかった。このスプリンガーの通信文から、ホノウリウリ抑留所では戦局による戦争捕虜の受け入れ状況との兼ね合いを連邦政府とハワイ軍政府が調整しながら、運用方法を決めていたのではないかと推測できる。

さらにスプリンガーは、この通信文で、当時経済的に疲弊していて家族収容が必要な家族は、赤十字の報告書では10件未満なので、本土の転住所への移送を勧めている (Springer 1943)。以上の知り得る範囲の軍政府の事情から、この頃ハワイでは、抑留者の家族がたとえ本土の家族収容施設を希望し、抑留者と共に暮らしたくと

も、「ホノウリウリ」での面会で顔を合わせる以外に家族と一緒に過ごせる時間はなかった状況であった。

### 6.3 戒厳令撤廃と「ホノウリウリ」の変化

1944年10月24日の戒厳令撤廃を見越して、ローズベルト大統領はその6日前の同月18日に大統領行政令9489に署名し、引き続きハワイは戦闘区域につき「適性外国人」の抑留を継続可能とし、「危険分子とみなす者」をハワイから排除できる措置を取った (Okihiro 2013: 269)。よって、日本人であった一世はそのままホノウリウリ抑留所に留まることになるが、ハワイ軍政府はアメリカ市民である日系二世を釈放しようとする。これに応じなかった日系二世の抑留者は11月9日に67名がツールレイク隔離収容所に転送された<sup>43)</sup>。彼らが釈放を拒んだ理由は、前掲のウラタによれば、都合良く捕まえておいて、釈放するのは不条理だということ、また、釈放されると日本語ができるので陸軍情報部に語学兵などとして徴兵されることを危惧したということであった (『ハワイ・パシフィック・プレス』2008年6月1日)。その一方で、この時「ホノウリウリ」から仮釈放25名と釈放12名を出している<sup>44)</sup>。戦後まで抑留された人間はいたものの<sup>45)</sup>、その抑留者数の推移から、日系人抑留所としての「ホノウリウリ」はこの頃、徐々に終戦に向かって収束に近づいていたようである。

1944年に、これらの日系二世の人びとが帰っていったのは、場合によっては、戒厳令によりホノルルの日系銀行の口座は凍結され<sup>46)</sup>、経済的に家族が困窮している筈だった。また社会に戻っても身元保証人への毎週の報告が義務づけられ、監視が付けられるなどの生活に制限があった。

前掲のサンドアイランド抑留所からホノウリウリ抑留所に移されていたニシカワにも、約15ヶ月の抑留の後、1944年5月20日に仮釈放の機会が訪れた。ニシカワの場合も、一時期日本

の中学校と大学で教育を受けた後に、ハワイに戻ってきていたので、婦米二世として扱われた事例である。回想録では、この仮釈放中に元の新聞社の仕事に戻ることを禁じられたニシカワは、友人宅に身を寄せながら昼はドールパイナップル会社のメカニック、夜は写真館で働き生活を成り立たせたと記している (西川 1982)。

一方、ニシカワの拘留中における7歳の息子と妻の境遇は、銀行の預金は凍結したうえに、夫ニシカワがサンドアイランドに抑留された時に職を辞すことを強要された妻は、国際赤十字社に助けを求めにいったが、持ち家のある限り、家財道具を売って食料を買うように言われていた。結局、家を引き払うためほとんどの物を友人に譲るか、二束三文で売った彼女は体調を崩したという (Hazama & Komeji 1985: 138)。ニシカワは当時について、子供も働き、妻は洋裁をして生計を立てなければならなかったと回想したうえで、こう付け加えている。

インターンされた人々 (抑留者の意) の家族は収容された我々より、もっともっと精神的苦痛の上に生活の道を求めて行かなければならなかったのである。その生涯の損失は、言語に絶するものであると思う (西川『ハワイ報知』1982年6月7日・括弧内筆者加筆)。

「ホノウリウリ」から仮釈放された数多くの日系二世たちは、1944年のハワイ社会へと帰って行ったが、ローゼンフェルド(2012)や小川(2013)により、この時期に仮釈放された抑留者がその後、社会において拒絶や敵視をされるなどの差別にあった体験が報告されている。これは、孤立していた家族のもとへ主が帰還し、さらなる社会的な孤立を迎えたということでもある。

しかしこの抑留者の帰還を分析するための、別の視点からの報告もある。ギャリン・ツル (Garyn K. Tsuru 2014) は農業、聖職者、自営業など戦時下においても住居があり、生活の基盤



が存続できた家庭からの抑留者の場合、アメリカ本土で抑留された人々よりも戦後の新生活への移項はむしろ順応的であったという見解を示している (278)。

このような個々の体験のなかにみられる差異は、抑留が与えた影響が各家庭につき大きく違ったということであろう。それでもなお、夫などが抑留所から帰るまでの間、抑留者の妻やたちのような立場の人びとには、「ホノウリウリ」に家族を訪ねることは、戦時下での緊張と苦痛をとともなう経験でありながらも必要なことであり、それを見ていた子どもには記憶に刻み込まれる行為であった。

## 7. おわりに

本稿は、太平洋戦争下ハワイのオアフ島ホノウリウリ抑留所に収容されていた日系人と、社会に残されたその家族の抑留所での面会をめぐる体験を明らかにしようとした。当時の日系社会の状況、ハワイ軍政府による抑留所の運営、さらには戦局の変化などを視野に入れながら当事者たちの体験の整理を試みた。その結果、まず、抑留者とその家族は日系人強制収容により「分断された家族形態」という事態に向き合うために、この面会制度を活用したこと、また双方にとって面会そのものが苦痛をとともなう行為であったことがみえてきた。しかしながらこの面会は、抑留所の内と外とを近づけ、時には引き裂かれた者たちを一体化したといえる。

抑留者の家庭の状況をも、父親や夫が抑留されることによって日系社会から疎外されるという、社会的な不安を抱く状況に置かれた人びともあり、それはむしろ、「ホノウリウリ」に足を運び家族に会おうとする程の孤立感に苛まれていたともいえる。これについては、例えば、世帯主が抑留されている状況でも周囲からの援助は少なく、ハワイに残った抑留者の家族もハワイを離れ本土の抑留所に向かわざるをえなかった家族も、共通の社会的抑圧と疎外感を経

験していたことから明らかである。

このような境遇から、ハワイで抑留されていた者の家族は、軍による送迎バスなどで外部からは見えなかった山間部の抑留所を訪ねたが、軍の管理下では緊張を強いられることもあり、面会者にとっては、少なからず負担となった出来事として記憶に残った。また抑留者においては、面会で子供などに会う事は嬉しいだけの行為ではなく、例えば抑留者が短歌に詠んだように、日増しに心に不安が生じるような気分にも苛まれることもあり、ようやく家族と会う時間が来ても、すぐに別離を迎えなければならなかった。

それでもなお、家族が面会で持参する工作の材料や食料などは、抑留者の生活を活性化させ、時には、手作りの下駄や野菜などを土産として家族に持たせる事もあった。家族は、抑留者に乞われた物を禁止物資でさえも持ち込むなど、面会を通じて出来る限りのことをした。このような物資の交換は、双方にとって生きる活力となったともいえる。

この面会を通じてみえた、まるで「ホノウリウリ」とハワイ社会が一体化しているかのような側面は、抑留者とその家族は面会制度を介して、ホノウリウリ抑留所とハワイ社会というふたつの場所をつなげ、抑留所の内と外に分断されてしまったお互いの生活の距離を縮めていたことの現れではないだろうか。例えば、抑留者の家族も「面会」というものを意識しながら社会生活を送り、抑留者は社会から隔離された日常生活を「面会」を楽しみにしつつ鉄条網の中で送っていた。したがって「ホノウリウリ」は、抑留所でありながら、家族を行き来させることにより両者が戦時下において耐えるための「確認の場」となっていたといえる。

しかしながら本論では、軍の面会制度については、保証された側面もありつつも抑留者に抑圧をかける「治安方策」に利用されていた可能性があったことは、オーラルヒストリーは存在しながらも、明確にすることは不可能であった。



ただしこれは、「ホノウリウリ」での軍政府の管理体制と運営方法を分析するための重要な要素だと考えたい。なぜなら、戦時下では軍という存在が、人びとの喜び、悲しみをともなう体験を左右する局面を支配することを、この事例においても分析するべきだからである。そもそも強制的に「敵性外国人」あるいは「危険分子」という名目において社会から排除された人びとにとっての、家族に定期的に会うといういわば「希望の糧」に条件を付けることによって抑留所を管理していたという可能性は、「ホノウリウリ」では面会制度を用いて抑留者をより良く扱った、という評価には至らないであろう。

また、ホノウリウリ抑留所内は太平洋戦線における捕虜収容所でもあったために、家族居留区を設ける政策が施行されなかったことに関しては、今後、面会制度との影響について明確にされるべき課題である。

ハワイの日系人強制収容は、たとえ一部の日系人が抑留対象だったとはいえ、引き裂かれた家族がハワイ社会の周縁で生きたという側面を持つ戦争体験を生んだ。彼らの体験は、この時期のハワイと太平洋戦争に関する新しい視点を見出すに値するものだと考える。

## 注

- 1) 「敵性外国人」とは、1798年にアメリカ合衆国が制定した憲法のひとつの規定に依拠する。アメリカ合衆国との間で宣戦布告あるいは侵略行為に及んだ国や政府などに対し、これらの国の市民で在留外国人を大統領が布告した際にアメリカ国内で逮捕・身柄の確保をできると定めたもの。語句の使用に関しては山倉（2011: 85）を参照。
- 2) 本稿では「日本人」とは移民し、アメリカ国籍を持たなかった人びとを指す。原文でいうところの一世（Issei）であるが、ハワイでは1952年まで帰化が認められなかったので本来の「日本人」とはこの時点までとなる。本稿では戦後までを扱うため、この間の抑留体験者は日本人と呼ぶ。これに併記して、日系二世とはアメリカ国籍を持つ移民二世である。しかし、「戦時日系

人強制収容」「日系人抑留所」「日系人抑留者」という場合は、これらの学術用語の示す「日系人」には日本人も含む。また本稿での「日系人」とは「日系アメリカ人」の意味である。

- 3) ハワイの抑留者の総数は近年のハワイ日本文化センター（以下JCCH）の調査では2,000人を超えるといわれており、その総人数はいまだ一定していない。
- 4) サイキのこの作品は、ノンフィクションという形態は取っているものの、抑留者名は実名であり、その時のインタビューの記録としてタイプ打ちしたメモや関連資料が多数残されている。本稿では、この資料をインタビュー記録として参照する。
- 5) 1990年代の終わりからJCCHが抑留所の位置を独自に調査し、バートン&ファーレルがその報告を聞き、本格的な調査に乗りだした（Burton et al. 2014: 44-45）。ここから、人びとの記憶に埋もれていたハワイの日系人強制収容が現地の教育普及運動にまで発展し、ホノウリウリ抑留所跡地へのバスでの見学も数回行われて来ている。2015年2月、ナショナル・パーク・サービス（国立公園局）の国定史跡として登録された。以下を参照 National Park Service, “Honouliuli A New National Monument” <http://www.nps.gov/> (2015.2.24検索)。
- 6) 本稿では「抑留所」と「収容所」とを使い分ける。ここでは、山倉（2011）の法制学の立場からのひとつの見解である逮捕から審問を経た場合は「抑留」、それらの手続きが不在で拘禁された場合は「収容」とそれぞれを呼べる可能性を参考にする。  
ただし、戦時日系人強制収容に関する研究史において、収容所（concentration camp）と抑留所（internment camp）という言葉は、使い分けられてきた。この背景のひとつには、収容所という言葉が、第二次世界大戦でのナチスドイツによるユダヤ人強制収容所を思わせるとしてアメリカ人のなかには嫌う傾向があるが、あえてアメリカ連邦政府によって行われた強制収容について彎曲表現を用いず「収容所」と呼ぶという立場もある。例えば、Japanese American National Museum（2009）では、用語集を設け、このような政府によって作られた彎曲用語をあえて使わない旨を説明している。
- 7) この研究チームの研究成果から、「ホノウリウリ」にいたドイツ系・イタリア系も含む様々な抑留者と戦争捕虜について、エスニックグループの

分類がわかりつつある。また、本来隔離されていた日系人抑留者と日本兵捕虜の一部の交流についても確認されているが、これについては稿を改める。

- 8) 例えば、アドラーは、両親が共にホノウリウリ抑留所に収容され、そこを訪ねていた子どもの事例を扱っているが、時にはその親子は同居していたようであり、個別の面会のようなものである (Adler 2014)。また、ツルの研究では、ホノウリウリ抑留所での家族の面会は楽しい思い出となり、アメリカ本土での抑留体験者に比べると、戦後のハワイの抑留者の社会的な適応を促したのではないかという心理学からの分析もある。ただし、ツル自身も認めているように、ホノウリウリ抑留体験者の全体に迫るものではない (Tsuru 2014)。
- 9) 当時アメリカ合衆国の準州だったハワイでは、ハワイ知事が必要な時にハワイ内に駐屯しているアメリカ合衆国軍隊に (他国などの) 侵略の防止を要請できるとした「ハワイ基本法」に基づき、戒厳令を宣言した。田丸 (1976: 187-90、付録『全般命令と布告』) を参照。また、戒厳令施行は1941年12月7日-1944年10月24日、取り締まりの対象は燈火、刊行物配付、集会検閲、武器の所有、弾薬および爆薬、アルコール飲料の販売、野外出禁禁止となどであった。
- 10) これに関しては、複数の文献などで日本人社会のリーダー的な存在が抑留対象者だったとされてきたが、オガワ & フォックスは当初から帰米二世や漁師なども対象者として明示していた (Ogawa & Fox, Jr. 1983: 136)。また、このような逮捕・抑留者のステレオタイプ化を疑問視する検証もある (小川 2013)。また、開戦直後のいわば初期の抑留対象者から比べて、ホノウリウリ抑留所開設後の抑留対象者が帰米二世中心になっていたこととその経緯はシェイバーほか (Scheiber et al. 2009) や注6) 山倉が明らかにしている。女性の抑留者に関しては古屋 (1964)『配所転々』の巻末、抑留者一覧の名簿を参照。
- 11) 権藤 (2008) によると1,867名、同上山倉によると1,875名。多少の人数の算出方法は違うようではあるが、抑留者が約900名で自主的抑留者が約1,000名という内訳である。
- 12) ラテンアメリカ諸国、ハワイ、アラスカで夫や父親との本土での合流を当局に申し出た家族を連邦政府は「自主的抑留者」と呼んだ (同上山倉 89)。
- 13) すでに同年2月から本土の抑留所へ移送されて

いた夫たちを追うかたちで申請した家族もこれに加わった。

- 14) この閉鎖の理由についてはHistory of the Provost Marshal's Office, Chapter IX: 10を参照。
- 15) ホノウリウリ抑留所の概説では、サンドアイランドの後続施設としての日系人抑留所として開設したという時系列的な位置づけがある (Niiya 2010; Rosenfeld 2011a)。しかし、抑留所としてではなく、収容所としての歴史をみると、サンドアイランド抑留所は1945年から同じ施設を使い戦争捕虜を収容していたということが明らかにになりつつある (Faulgout 2014)。
- 16) 例えばシャイバーほかはある期間 (1943.1-1944.6) の抑留者の内訳を、一世の180人抑留 (359人審問)、また二世を220人抑留 (670人審問) としている (Scheiber et al. 2009: 66)。ホノウリウリ抑留所は1943年3月の開設であるが、上記の統計の期間がほぼ該当するため参照。
- 17) サンドアイランドに抑留されていたポール大隅の妻への面会許可証がJCCHに収蔵されている。日付は1942年6月21日。ホノルル港・埠頭 No. 12に時間・場所の指定もあり、差し入れ・食べ物は一切禁じられている。
- 18) 1940年のハワイの推定人口を参照 (Lind 1946: 14)。
- 19) このハワイアの教師 (Ms. Hardy) の真意はわからないが、当時のエスニックグループ同士の関係、また社会構造を示すオーラスヒストリーとして引用する。原文では以下のような会話だった。  
I said, "What about, like, the rest of the people?"  
She said, "Hey, I'm Hawaiian. What they gonna do to a Hawaiian?" That's what she said. And she helped us so much... (Kitajima 2010).
- 20) 赤十字は、その成果はさておき、抑留者の家族への支援を実際に行っていた。詳しくは注8) アドラーなどを参照されたい。
- 21) 実際のオーラルヒストリーでは "kabidara-cheese" と言っている。
- 22) 若本儀一だと思われる。本稿では、前掲注10) の古屋による抑留者一覧名簿のホノウリウリ抑留所への入所者 (ABC順) にしたがって、日本名が確認できる者については括弧で付す。
- 23) ハワイ軍政府発令の全般命令で違法とされた敵国国旗の保持による。この頃、FBIの捜査で、逮捕者が見覚えのない日本国旗が発見されたという例はほかにも報告されている。日系人最初の準州議員だった阿部三次も経営していた映画

- 館から日本国旗が見つかり、一度は不起訴になったが抑留された（鈴木 2012: 30）。
- 24) ホノルル市内キング通りにあるハワイ司法博物館前にあるカメハメハ一世の像は1880年に造られた。Rose, G.R (1978) *Symbols of sovereignty: Feather girdles of Tahiti and Hawaii*, *Pacific Anthropological Records*, no. 28, Department of Anthropology Bernice Pauahi Bishop Museum Press, Honolulu, p. 41を参照。また戦時下においては、その向かい側にあるイオラニ宮殿内にハワイ軍政府のオフィスが設けられていた。
- 25) 一方、ホノウリウリ抑留所に他の家族と車で乗り合わせて父親に会いに行ったという家族もあり、面会の交通手段は必ずしも限定されていなかったようだ。
- 26) しかし、カウアイ島からオアフ島へ移送されるとき抑留者については、波止場で妻も含めた知人たちが泣きながら見送ったという経験も報告されている（注15） Rosenfeld: 136）。
- 27) 田坂とTasakaは同一人物である。田坂養民や後述の西川徹などのいわゆる婦米二世は、和英両言語で資料を残している。本稿では、その一次資料の言語によって標記を使い分けることとする。
- 28) この日時が面会パスに書いてあったのか、軍部から家族へ連絡がいったのかは不明であるが、家族がそのパスを持って指定の日時・場所に集まったということから、詳細を伝える文書が同時に送付されたか、パスに書いてあったと推測する（田坂 1981: [6]）。
- 29) 田坂 1981によると月に1回、ハセヤマ（Kodama-Nishimoto: Haseyama 1992）の記憶、またツル（2014）の調査したSEは2週間に一度などの証言がある。
- 30) 川添は日本語新聞『日布時事』の記者だった。
- 31) この歌には1番と2番があるがこれは後者である。
- 32) 『イースト・ウェスト・ジャーナル』1985年2月15日によると、西川徹（ニシカワ・トオル）により別の日系人の米袋でできた化粧回しのように大きいエプロンに「地獄谷」と墨書したのが最初だという。
- 33) 「ハムカン・ギター」と呼ばれたハムの缶で作ったギターとバイオリンについては鈴木みずえのハリー・ウラタへのインタビュー（1991）、バイオリンについては鈴木常夫の回想（1981）、三味線で宴会や囲碁などの差し入れについては、2011年の田坂への鈴木啓によるインタビュー記事など、複数のオーラルヒストリーがある。
- 34) 原文ではヒモ“cord”だが、筆者の意識により「鼻緒」。また、オーラルヒストリーからはフェンス越しに向き合いながら物品を交換していたのかどうかは不明。
- 35) イノクチ家が面会に行く方法については、抑留所で働く知人がいたらしく連れていってくれたという。
- 36) 豊田は1943年の4月に海軍士官であったが、搭乗していた爆撃機が撃墜されソロモン諸島海域で哨戒艇に捕獲された（1979: 312-13）。豊田の著作なかには、「邦人」がこの谷を「地獄谷」と呼んでいたという記述が繰り返し登場する。注32）。
- 37) 注29）のハセヤマの回想でも箱があるとおもちゃを作ったこと、面会者に塗料、釘やハンマーを持参してもらったと語っている（1992: 1738）。よって、豊田は日系人抑留者が玩具を買ったと推測しているが、玩具は手作りだった可能性が高い。
- 38) 例えば、JCCHには貝で作ったネックレスがコレクションとして収蔵されている。
- 39) しかし、サイキのウラタに行ったインタビューのメモには、匂いが出るため、干物を焼くのに困ったと残されている（Saiki d.u. b）。
- 40) 密造酒造りの詳細は田坂へのインタビューをもとに書かれた鈴木（2013）を参照されたい。
- 41) ここにはその前の文書への返信らしき内容が伺われる。返信相手は文書には見えないが、ハワイの事情を説明しているため、相手は連邦政府側だと思われる。
- 42) ハワイで一番大規模な「捕虜収容所」でもあったホノウリウリ抑留所に早い時期に移送されてきたのは、先述の文書と同年同月の1943年11月に、ギルバート諸島（現在のキリバス共和国）から大勢の日本軍の非戦闘員だった朝鮮人捕虜であった（Rosenfeld 2011b）。
- 43) Okihiro（1991）や山倉（2011）による文書を資料としている研究では67名となっているが、当事者のウラタの回想によると69名である（『ハワイ・パシフィック・プレス』2008）。
- 44) スプリンガー少佐は毎月の審問件数の報告書をモリソン陸軍准将に送っていた。例えば、1943年9月は抑留45人、仮釈放18人、釈放24人であったが、1945年5月の報告は抑留13人、仮釈放14人、釈放8人（強制退去1）となっている。
- 45) 鳥田（2004）は、ハワイの婦米二世で国籍離脱者の3名が1946年の春の時点でも「ホノウリウ



リ」に抑留されていた事例を示している (215)。  
46) 1941年12月9日には、ホノルルの日系銀行口座  
が凍結された (Allen 1950: 433)。

## 参考文献

Adler, M. Suzan

- 2014 “The effect of Internment on Children and Families: Honouliuli and Manzanar,” In Suzanne Falgout and Linda Nishigaya (eds.) *Breaking the Silence: Lessons of Democracy and Social Justice from the World War II Honouliuli Internment and POW Camp in Hawai‘i*, Social Process in Hawai‘i, volume 45, 217–236. Honolulu: University of Hawaii at Manoa.

Allen, Gwenfread

- 1950 *Hawaii’s War Years 1941–1945*. Kailua, Hawai‘i: Pacific Monograph.

Burton, F. Jeffery and Farrell, M. Mary

- 2007 *World War II Japanese American Internment Sites in Hawaii*. Trans-Sierran Archaeological Research.

- 2008 *Jigoku-Dani: An archaeological Reconnaissance of the Honouliuli Internment Camp, Oahu, Hawaii*. Trans-Sierran Archaeological Research.

Burton Jeff, Farrell Mary, Kaneko Lisa, Linda Maldonato and Kelly Altenhofen

- 2014 “Hell Vally: Uncovering a Prison Camp in Paradise,” In Suzanne Falgout and Linda Nishigaya (eds.) *Breaking the Silence: Lessons of Democracy and Social Justice from the World War II Honouliuli Internment and POW Camp in Hawai‘i*, Social Process in Hawai‘i, volume 45, 16–42. Honolulu: University of Hawaii at Manoa.

Falgout, Suzanne

- 2014 “Honouliuli’s POWs: Making Connections, Generating Changes,” In Suzanne Falgout and Linda Nishigaya (eds.) *Breaking the Silence: Lessons of Democracy and Social Justice from the World War II Honouliuli Internment and POW Camp in Hawai‘i*, Social Process in Hawai‘i, volume 45, 109–147. Honolulu: University of Hawaii at Manoa.

古屋翠溪

- 1964 『配所転々』布哇タイムス社。

権藤千恵

- 2008 「ハワイ日系人の戦争体験—収容所拘留者とそのプロセス」『立命館言語文化研究』20(1): 103–114, 2008–09。

Hawaii Nikkei History Editorial Board (ed.)

- 2012 “Chapter 5, GISEI (sacrifice): Internees and repatriates,” *Japanese Eyes American Heart, volume II: Voices from the home front in World War II in Hawaii*. Watermark Publishing.

Hazama O. Dorothy and Komeji Jane

- 1985 *OKAGE SAMA DE: The Japanese in Hawai‘i 1885–1985*, Bess Press.

Hishinuma, S. Ramsey

- date *Internment Woe*. (personal essay, unknown unpublished) Japanese Cultural Center of Hawaii Resource Center.

Honda, Gary (ed.)

- 2008 *Family Torn Apart*. Japanese Cultural Center of Hawaii.

Inokuchi Yutaka

- en-denshovh-iyutaka-01-0014-1. (2012, October 13) *Densho Encyclopedia*. Retrieved June 18, 2014 from <http://encyclopedia.densho.org/sources/en-denshovh-iyutaka-01-0014-1/>.

Japanese American National Museum

- 2009 *Terminology and Japanese American experience, Educator Resources*, Retrieved November 1, 2014 from <http://media.janm.org/projects/ec/pdf/EC-Terminology.pdf>.

Japanese Cultural Center of Hawai‘i

- 2012 *The Untold Story: Internment of Japanese Americans in Hawai‘i*, Written & Directed Ryan Kawamoto, DVD.

- a, World War Internment in Hawai‘i <http://www.hawaiiinternment.org/history-of-internment> (Retrieved 2013.9.8. 2014).

- b, Samuel Nishimura collection, Resource Center.

- c, 津島源八のノート、Resource Center.

Kashima, Tetsuden

- 2003 *Judgment Without Trial: Japanese American*



- Imprisonment During World War II.* University of Washington Press.
- Kitajima Masamizu  
denshovh-kmasamizu-01-0014, 01-0019-1. (2012, October 13). *Densho Encyclopedia*. Retrieved June 3, 2014 from <http://encyclopedia.densho.org/sources/enshovh-kmasamizu-01-0019-1/>. 01-00-14, Densho Digital Archive, Densho Visual History Collection. (Access May 3 2013)
- Kodama-Nishimoto, Michi & Haseyama, Toso  
1992 Interview with Toso Haseyama, *An Era of Change: Oral History of Civilians in World War 2 Hawaii*, Retrieved April 23, 2014 from <http://hdl.handle.net/10125/29865>
- Lind, W. Andrew  
1946 *Hawaii's Japanese: An experiment in democracy*. Princeton, University of Hawaii: Princeton University Press.
- Mori, Y. Ramsey  
en-denshovh-mramsay-01-0016-1. (2012, July 2). *Densho Encyclopedia*. Retrieved September 27, 2014 from <http://encyclopedia.densho.org/sources/enshovh-mramsay-01-0016-1/>.
- Niiya, Brian  
2010 *History of Japanese internment, Hawaii Internee Story*. Retrieved May 2, 2014 from <http://www.hawaiiinternment.org/>
- 西川 徹  
1982 『ハワイ報知』6月7日。
- Nye, Doris  
Oral History Interview, 03/04/2009, Japanese Cultural Center of Hawai'i.  
Office of the Chief of Military History, Special Staff.  
U.S. Army  
United States Army Forces Middle Pacific and Predecessor Commands During World War II, 7 December 1941–2 September 1945, History of Provost Marshal Office, v.24, pt.2. Chapter IX.
- Ogawa M. Dennis & Fox, Jr. C. Evarts  
1983 Japanese internment and relocation: The Hawaii experience. In Roger, Sandra C. Taylor & Harry H. Kitano (eds.), *Japanese Americans: From relocation to redress* (revised edition), 135-138, Seattle: University of Washington Press.
- Okiehiro, Y. Gary  
1991 *Cane Fires: The Anti-Japanese Movement in Hawaii, 1865–1945*, Temple University Press.
- Rosenfeld, Alan  
2011a "An Everlasting Scar: Civilian Internment on Wartime Kaua'i." *The Hawaiian Journal of History*, 45: 123–145.  
2011b "Honouliuli" (detention facility), *Densho Encyclopedia*, Retrieved September 8, 2013 from <http://encyclopedia.densho.org/Honouliuli>.
- Saiki, S. Patsy  
1982 *Ganbare!: An Example of Japanese Spirit*. Mutual Publishing.  
date "Honouliuli Visitation," Patsy Saiki  
unknown a Collection, Folder16, Japanese Cultural Center of Hawai'i, Resource Center (interview memorandum).  
date "Minoru Urata," Patsy Saiki Collection,  
unknown b Folder 16, Japanese Cultural Center of Hawai'i, Resource Center (interview memorandum).
- Schieber, N. Harry, Jane L., Scheiber and Benjamin Jones  
2009 "Hawaii's Kibei Under Martial Law: A Hidden Chapter in the History of World War II." *Western Legal History* (22) 1 & 2: 1–102.
- Slattery, V. Eugene  
1943 *Request for Family Internment of the mainland of the United State*. Office of the Chief of Military Governor, Iolani Palace Hawaii, Japanese Cultural Center of Hawai'i Resource Center.
- 相賀安太郎  
1948 『鉄柵生活』日布時事社。
- Springer, F. Louis Major infantry  
1943 Japanese Cultural Center of Hawai'i (Nov.) Resource Center. (A report).  
1944 *Detailed Report of civilian ordered excluded, paroled or released by the commanding General, United States Army Forced, Pacific Ocean Area, during the period from 1 November 1944 through 30 November 1944*. Japanese Cultural Center of Hawai'i

Resource Center.

鈴木 啓

- 2012 「日系人政治家の草分け 阿部三次 (1895-1982)」『ハワイ報知100周年記念  
ハワイ日系パイオニアズ—100の物語  
—』ハワイ報知社: 28-30。
- 2013 「ジャック田坂『ホノウリウリで酒を  
造った話』聞き手:鈴木啓」『ハワイ報知』  
4月2日 [5]。

鈴木みずえ

- 1991 「真珠湾攻撃50周年 体験者のこぼれ  
話」Kokiku, Dec. 1991 (v.17) 12: 38-39。

鈴木常夫

- 1981 「ホノウリウリを想う 上」『ハワイ報  
知』1981年8月29日 [7]。

Swedish Vice Consul Gustaf. W. Olson

- 1943 *Reports on Hawaii Internment Camps, 19  
June 1943 and 23 September 1943.* JCCH.

田丸忠雄

- 1976 『ハワイに報道の自由はなかった』毎日  
新聞社。

Tasaka, Jack

“Oral History Interview with Jack  
Tasaka.” Interview by Ted Tsukiyama,  
Jane Komeiji, and Edwin Kawahara. Oct.  
9. 2003. MS. Japanese Cultural Center of  
Hawai'i. Print.

田坂養民

- 1980 『日系人収容所 ホノウリウリ秘話』ハ  
ワイ日本文化センター所蔵 (『ハワイ報  
知』1981年1月1日連載原稿)。
- 2001 鈴木啓によるインタビュー (2001.8.21)  
オーディオ。

豊田 穰

- 1972 「私のエンブラ俘虜記」文藝春秋 50 (11):  
312-320。
- 1979 「地獄谷収容所」『割腹 虜囚ロッキー  
を越える』文藝春秋: 59-87。

Tsuru, Garyn

- 2014 “Psychic wounds from the past:  
Investigating intergenerational trauma in  
the families of Japanese Americans  
interned in the Honouliuli Internment  
and POW Camp,” In Suzanne Falgoust  
and Linda Nishigaya (eds.) *Breaking the  
Silence: Lessons of Democracy and Social  
Justice from the World War II Honouliuli  
Internment and POW Camp in Hawai'i,  
Social Process in Hawai'i*, volume 45,  
237-256. Honolulu: University of Hawaii  
at Manoa.

山倉明弘

- 2011 『市民的自由：アメリカ日系人戦時強制  
収容のリーガル・ヒストリー』彩流社。

Young, Betsy

- 2013 Interview by author, Honolulu (2013.8.13).

新聞 (著者名のないもの)

『ハワイ報知』

1981年8月29日、9月5日。

1982年7月9日。

『ハワイ・パシフィック・プレス』

2008年6月1日。

『イースト・ウェスト・ジャーナル』

1985年2月15日「年輪 音楽に魅せられて70年  
西川徹物語 (その12)」。

# The Family Visitation System in Japanese Internment in Hawaii: The Experiences of Internees and their Families

AKIYAMA Kaori

SOKENDAI (The Graduate University for Advanced Studies),  
School of Cultural and Social Studies,  
Department of Japanese History

The aim of this paper is to provide a new perspective on aspects of the experiences of Japanese internees in Hawaii during the Pacific War as shown by the family visits to the Honouliuli Internment Camp that existed from March 1943 to around August 1945. This camp was used after the first detention camp on Oahu known as Sand Island was closed. Arrests and incarcerations of Japanese and Japanese-Americans that began after Japan's attack on Pearl Harbor in Hawaii constituted a selective internment. Many male householders were taken away from their families, while other family members were left. Because of this situation, these family members tried to follow the internees who were sent to the War Relocation Centers (WRC) or camps.

The families of internees from Hawaii spent their days under pressure and in isolation from the rest of society, but the visitations to the Honouliuli Internment Camp gave them some relief from the pressure although it was another type of painful experience. Some features of the visits have been clearly described in the oral histories. On Sundays, military buses transported the regular visitors to Honouliuli, and visitors brought various things to the camp mess hall while internees prepared some gifts for them. These visits were opportunities for the members of families that had been torn apart to help each other to endure their wartime status and the isolation caused by the internment. For internees, the family visits were a nervous but joyful routine.

There is an oral history that seems to indicate that the visitor system at the Honouliuli camp was a type of method that the military authorities used to control internees. Moreover, there was mention in a military telegram of plans to build family units in the Honouliuli internment camp. However, these were never built because the site needed to be opened for incoming prisoners of war from many battlefields as the Allies gained the advantage in the war.

This paper theorizes that the apparent intimacy between Honouliuli and the community in Hawaii may have come about because the visitation system that united internees with their families helped to bridge the gap between those inside the internment camp and the society at large. For the families in Hawaii, the Honouliuli Internment Camp was a special place that helped to confirm their identity. However, future investigation is needed regarding the military control and use of visitations at the site to control internees, and the management of family requests for transport to the WRC and camps by the Hawaii Military Government.

**Key words:** Pacific War, Hawaii, Japanese internment, martial law in Hawaii, voluntary internment, Sand Island Internment Camp, Honouliuli Internment Camp, visitations, POW camp.